報　　告

ミクロネシア点描

―トラック島野戦病院慰霊団に参加して―

富山県農村医学研究会会長　豊田文一

目　　次

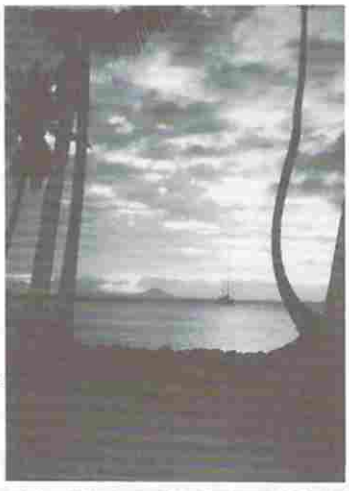
はじめに
1．トラック島，今は
2．移りかわる人口の経緯
3．あさげ
4．奉公袋
5．慰霊碑に思う
6．モデル冒険ダン吉
7．Love Stick（よばい棒）
8．海上便所，その後
9．ライフ・ジャケット
10．ナンマドール遺跡
11．傷痕（きずあと）
12．マウイ航空
13．バンザイ岬
14．トラック島の過去における結婚の慣習
15．トラック島の食糧と食事の変化
16．一つの印鑑（ハンコ）

上空からみたトラック島環礁

はじめに

42年の星霜が流れた。私の人生のうちで断ち切れないものは，やはり生と死の間を彷徨したトラック島である。それなればこそ戦後すでに3回にわたりこの島を訪ねている。今やミクロネシヤ連邦として独立しているもののアメリカの準州なみに統治され，あらゆる点で援助され，住民は安らかな生活をおくっている。

私どもトラック島野戦病院慰霊団は，2月12日，空路約6時間で，現地に着いた。静寂な島のたたずまい，緑にはえる椰子の密林，



春島海岸

春島野戦病院跡における慰霊祭

また平地にはハイビスカス，ブーゲンビシア，カトレアなど色鮮やかに妍を競う。

住民は何のくったくもなく，安らかな生活を享受している。目的は慰霊であったが，余暇をぬって移りゆくミクロネシアの現状を見聞し，これをご紹介しようと思う。

1．トラック島，今は

敗戦時，トラックの人口は7千，今は3万4千，40余年の間，5倍にふくれあがっている。資料によると1家族当りの人数10人弱，どこへ行っても子供がゴロゴロしている。日本ではとうてい考えられない。

敗戦時，日本軍は陸海あわせて4万人，内地からの食糧が2年余の間も絶え，戦闘よりも生きんがための自活が最大の業務であった。椰子を始めとし密林の樹木を伐採し，畑を作り，甘藷を植え，漸く生命をつないでいた。ジャングル中の食えるものは取りつくし，漁撈にでれば，米軍機の爆撃，私の部隊などは1日1000カロリー，これでもいい方であったが，兵員の体重は40キロ台はおろか，それを割るものが多かった。毎日病院へ運ばれるものは栄養失調のものばかり，これに対する薬剤は皆無，手をこまねいて死を待つばかりである。

しかし今の島民をみると，子供は生き生きとして遊び，中年以上では肥満体が多く，70キロ以上はあるだろう。とくに女性が目立つ。自生するパンの実，タロイモ，タピオカ，バナナ(食用)，また珊瑚礁で獲る小魚，椰子のコプラを料理に用い，肥肪分摂取は十分である。このように島での食糧については豊富であるし，また住民のほとんどはキリスト教徒，受胎調節は神の教えに背くものとして，自然のままに子供を産む。私どもの駐留していた頃は，土地にはえる食糧になるものは，日本軍に収奪され，彼らも飢餓に苦しみ，自然出産をひかえたのであろう。

子供の数を聞いてみると10人以上はざらであり，何のくったくもない。私の眼からは地上の楽園と思われる。

生まれた小供18人の家庭

彼らが，いつまでもこの地で，安らかで楽しい生活を享受するよう祈って止まない。

2．移りかわる人口の経緯

1932年50,045人であるが，1923～1932年の出生11,773人(千人当り23.9人)，死亡11,571人（千人当り23.5人）で僅かに202人の増（千人当り0.4人)で，人口増加をみられない。現在のトラックでみた1家庭の家族数平均10名をみると驚異に価する。その原因はどこにあるか。

昭和7年（1932）南洋庁ヤルート医院が性病検査を行っている。その成績は男183名，女228名のうち，男では梅毒罹患率53.4%，淋病31.3%，軟性下疳6.3%，女では梅毒57.0%，淋病51.3%，軟性下疳3.5%と性病の極めて高い率の罹患が報告されている。長崎協三院長の言によると「淋疾は島民の間において〝男の病気〟，あるいは〝女の病気〟という名称で，当然1度は罹患すべき一種の疾病なりと思惟され，その広汎な蔓延は推察するに難からざれ共，疾患を以て診察を乞うもの極めて少数なり」と述べており，大正13年（1924）青年84名を検査した所，尿中に淋菌を証明したもの40名，47.2%，この一部の青年についての成績からみれば島民全体の罹患率は極めて高いものであろうと述べている。

しかし日本の統治後は，各支庁医院において，これを徹底的に治療と啓蒙を行ない，これらは絶滅されたようで，このことは上述せるように著しい出産率，従って人口増加につながるものであろう。

思うに1521年，マゼランにより南洋群島が発見され，その後スペインにより統治され，さらに1885年ドイツの支配するところとなり，大正3年（1914）第1次世界大戦の初期，日本海軍南方派遣隊が占領，以来日本の委任統治領として，昭和20年（1945）まで続いた。

先に述べたように，自然に恵まれた南洋の処女地に，西欧の性病が，その萌芽をこの地に蒔き，これがまたたくまに広くミクロネシアの各地に蔓延させ，このことは人口増加を阻止したものとみるのが妥当であろう。

私は，現在の出産の状況をみるにつけても過去のいまわしい性病の蔓延を考え，日本の統治の間において，その絶滅に最大の努力を払った衛生関係者に敬意を表さざるをえない。ただ，今は，人口増加に伴う食糧問題は等閑に附すべきでなく，現在統治を行っているアメリカも十分考慮すべきであろう。

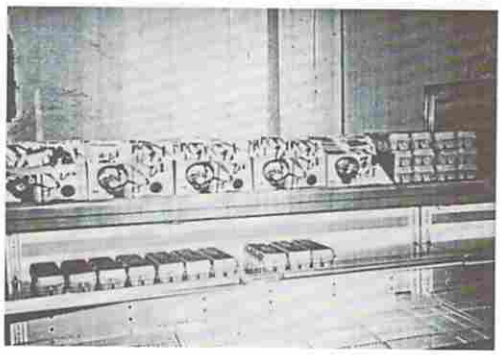
以上過去の資料を渉猟し，ミクロネシアにおける急激な人口増加に思をいたし私見を吐露したわけである。

3．あさげ

公務員や勤労者，労働者の賃金の支払いは月2回，第2，第4金曜日である。その日は離島から発着する巡航船やモーター・ボートは島民を満載して波止場に着く。この近くにスーパー・マーケットがある。今まで3回ここを訪ねたが最近できたものらしい。もの珍しかったので，私はその中に入りこむ，売場面積は，高岡の場末にあるものとそう変らない。その一角に眼をやると，何と日本字で書かれた食料品が広いスペースをとっている。味噌，醤油，さらにインスタント食品が，棚狭しと並べられてある。とくに平仮名で鮮やかに印刷された〝あさげ〟である。インスタント味噌汁である。その他インスタント・ラーメン，カップヌードル，私はかつて島民の生活にとけこんでいた過去を思い出し，その嗜好の変り方は全くの驚きである。

主食は，離島の方は，パンの実，タロイモ，タピオカ，バナナであるが，この春島は最も開発されているせいか，経済的にもゆとりがあるのか，スーパーで食料を買い求めるものが多いのだろう。なお米も主食としているものもあるらしく，その売場もある。これはアメリカ，オーストラリアからの輸入で，その価格は日本の1/6－1/10位である。ホテルで私どもも出されたが，余り不味く，〝こしひかり〟〝ささにしき〟を食べなれているわれわれは食べる気にならない。なおこの島へは日本からも来ているが，少数らしい。島民の嗜好がどうして変ったか私にはわからない。戦後アメリカの統治下にあり，アメリカ製の食料品があってもよさそうだが，これは見当たらない。

労働者，勤労者は週休2日制，労務者は1日10ドルの賃金，稼働20日として月200ドル，その他の勤労者は200～300ドル，公務員は最も高く300～1,500ドルと聞いた。ただ離島へも赴いたが，ここでは仕事がなく，その生活は40余年前とほとんど変りなく，現地の食糧（タロイモ，パンの実，タピオカ，バナナ）で自活している。ただ，それでも春島のスーパーへ2時間，3時間の船にゆられながら嗜



スーパー，上段は〝あさげ〟の陳列
下段は〝かまぼこ〟

好食料を求めに来る。それも先に述べたように，その支払日に波止場も雑踏し，スーパーへ吸いこまれてゆく。

4．奉公袋

同行の某君，奉公袋をぶらさげてきた。それをみただけで懐旧の念にかられた。私は昭和7年大学を卒業，24才で徴兵検査をうけた。当時医科系学生だけは卒業まで徴集延期の制度であり，検査の結果第2乙種，ヤレヤレ兵隊にならんでもいいとひと安ど。しかし毎年簡閲点呼というものがあり，この奉公袋をさげて富山市のある小学校校庭へ出頭し，壇上に立ったその校下の軍曹が点呼する。威張りちらして私どもいわゆる未教育補充兵に気合をかける。「コラ，姿勢が悪い。気をつけ，もとえ!!」で散々いためつける。軍隊に入るのはいやな気がする。これが毎年1回，昭和12年まで続くのだが，おかしなことに，この未教育補充兵に毎年，戦時命課というのものが通知される。それは最初の2年は野戦予備病院附軍医，あとの3年は山砲兵第109連隊附軍医，まあこれは戦争になったとき，そこの軍医だぞ，心得ておけということらしい。こんなわけで私も奉公袋をもっていた。ただオレのようなものを召集するようになったら日本の国も終りという感を深くしていた。

あにはからんや，日支事変ぼっ発の昭和12年7月，突如として召集され，金沢の山砲兵連隊へ入営した。ところが入ってみると衛生部見習士官の階級が与えられて即日将校待遇，乗馬隊だったので，将校当番と馬当番と2名の当番がつく。身の廻りの世話をしてくれる。家にいるより待遇がいい。その後敗戦まで5年半軍務についた。

奉　公　袋

この某君の奉公袋，何十年振りにみてなつかしい。この裏に次のようなことが書いてある。金沢歩兵第7連隊司令部，収容名，1．軍隊手帖，勲章，2．適任証明書，軍隊における特業教育に関する証明，3．召集及点呼令状。

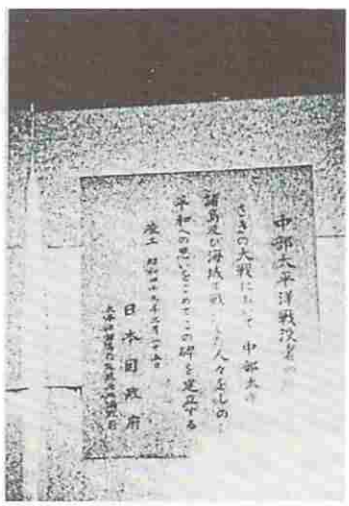
ここに奉公袋を示して，思い出のよすがとする。

5．慰霊碑に思う

中部太平洋の激戦地，パラオ，グアム，サイパンには，日本政府によって慰霊碑が建立されている。しかしトラック島は，米軍の砲爆撃にさらされながら米軍の上陸はなかった。しかし〝飢えと炎の島〟といわれるように，数知れぬ戦死者，戦病死，さらに栄養失調による餓死者が続出していた。それに対して日本政府は顧りみる所なく放置してあった。

ただ私どもは帰還に際し，野戦病院付近にささやかであるが墓標を埋めてきた。

今は椰子や雑木の密林のなかに丈なす雑草がはえ繁りその所在を明らかにするのに苦労



サイパンの慰霊碑

中部太平洋トラック島慰霊碑

する。過去の記憶を辿りながら僅かの小径の急坂を喘ぎながら登る。草蒸す屍いずくぞやの感を深くする。しかしこの地に防衛の主力であった松本歩兵第150連隊の生き残りの人々が主唱し，富山，石川県の戦友に働きかけ1980年，漸く春島海岸の景勝地に慰霊碑の建立の運びとなった。

総工費5000万円，トラック島附近の中部太平洋で戦没した軍人軍属，また犠牲となった各島住民のための慰霊碑でアフリカ産の黒御影石で造成され，碑の表面には善光寺智光上人の筆になる「和」の文字が刻まれている。なおこの土地はモリ・マサタカ氏の提供によるもので，氏の祖父は高知県人森小弁氏で日系最初の開拓者，〝冒険ダン吉〟のモデルとして有名である。マサタカ氏夫人ウメコは，私どもの野戦病院で看護婦補助の仕事をしていたが，戦後ハワイ・ホノルル大学へ入学，正式の看護婦の資格をとり，トラック病院の婦長をつとめていた。現在トラックの赤十字理事長（President of Red Cross）の任につき社会福祉の面で活躍している。

モリ・ウメコ（前列左）その後の女性は次女（四国女子大出身）

私ども慰霊団は，この碑の前にて戦友を偲び厳かな慰霊の行事を行ない，空路ポナペに向った。

6．モデル　冒険ダン吉

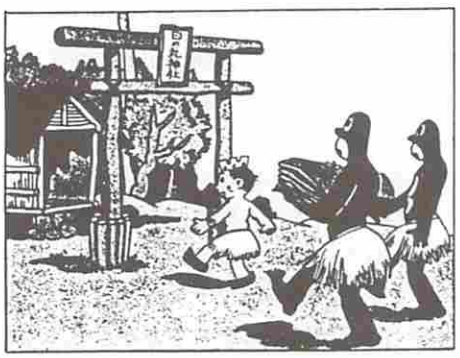
〝冒険ダン吉〟が始めて少年倶楽部に登場したのは昭和8年からで，満6年間の連載である。作者は島田啓三。当時の少年達をわかしたらしい。

私はかすかにこの漫画の名は覚えているが，その内容について全く記憶がない。しかしこれにひかれたのはトラック島への旅で，前述のモリウメコの夫君のマサタカ氏の祖父にあたる森小弁氏がそのモデルであると聞かされとくに関心をもった。それで帰国後，古本屋などであさってみたが見当たらず，困惑して富山県立図書館長に相談したところ，ここに所蔵してあるとのことである。早速これを借りて，ページをめくると漫画の絵物語であり，満6年の連載で膨大なものである。

ダン吉少年は，ボートに乗って船遊びをし

（火種つくり）

ているうちに波のまにまに，風の吹くままに椰子の木繁る南洋に流がされたところから始まる。しかし舞台は小さな島ではなく，象，河馬，ゴリラ，虎などの猛獣や大蛇，キリンなどが登場してくる。すなわち大陸の様相である。この地についてから智恵と奇策秘策を用いて酋長を屈服させ頭に王冠をいただく。未開のクロンボを輩下にして，そこにダン吉王国を作る。



（日の丸神社）

しかもこの王国の象徴は日章旗であり，この地に上陸してくる外国人を奇策をもって追っぱらい王国の安全を守っている。あまつさえ城郭まで作り，ダン吉王の威厳を示す。日の丸神社などもたてる。

世界の文明にならって郵便局，銀行なども作り出す。他の海賊船や蛮族の来襲も奇策を

用いて撃滅する。このようにしてダン吉の繁栄を画いている。ことに時代は日中事変にさしかかると中国兵のいる所へ遠征し，戦闘を交える。

このダン吉の漫画物語りは，南方で一旗あげる少年のノンフィクションで，高知県人森小弁のトラック開拓の先駆者として，腕一つでこの地一の分限者となったことから〝冒険ダン吉〟のモデルとして宣伝されたのであろう。

前章にモリ家について触れたので敢て追記する。

7．Love Stick（よばい棒）

40余年前，上空より遮蔽された原始密林のなかの野戦病院には，炊事や雑役に多くの島の男女を業務の手助けに使っていた。この連中と仲間のように親しくなり，島の昔からの色々の話を聞いた。米軍の空爆がとだえると，静寂そのものであり，月夜ともなれば，字を読めるほど明るい。若い男女は浜辺で踊り，澄みきった唄声も響く。ここで彼らの恋もめばえるの

Love stick のミニチュアー

であろう。

そこで聞いた話だが「よばい棒」のことである。今，土産店でそのミニチュアを売っている。もともとは2m位の細い木の棒で，その半分位，先の方にギザギザの切り込みがある。男はこの棒を担えて，家族の寝静まってからめざす恋人の所へ忍びこむ。今でこそ鉄筋や板によって外壁がかこってあるが，当時は，ニッパ椰子で腰板がわりに張りつけてある。めざす若い女の寝所と思われ所から，隙間を通して，その棒をさしこむ。女はその先端をさすって，棒に刻まれたギザギザをさする。この切り込みは，それぞれ違っており，女はそれに触れ，かねて覚えていた切り込みの型であれば，誘われて外にでる。

この稿を書き終えてから古本屋で手に入れた〝ミクロネシアの民話〟を読んでいると挿図に次のようなものがのっていた。これは魚を刺す銛（モリ）である。この左の方はLove Stickと同形である。

古い時代の銛が，いわゆる〝よばい棒〟と称せられるものに移り変ったように憶測される。

今はこれをLove Stickと称して土産物店で売っている。私はこれを数本手に入れて持ち帰り，トラック土産の一つとして友人などにおくった。

8．海上便所，その後

トラックに駐留していた頃，島民の便所は陸地より30〜50m位橋をかけた先端にあり，

そこで用を足していた。私どもも小のほうはとにかく，大の方は海上まで橋を渡る。そこから落ちる固形物は，浅い珊瑚礁に泳ぐ色あざやかな熱帯魚の餌（エサ）となり，群をなして集ってくる。この眺めを楽しみながら息を入れていると時ならぬ空襲があり，用なかばにして防空濠へ退避することは稀でなかった。

ところが数年前，この島にコレラが流行し，1年間外国人の入島が禁止され，法律で海上便所の廃止が義務づけられたと聞いていた。

今度ここに来てみると，以前のように長い橋を渡る便所は見られない。しかし従前のようではないが5〜10mの橋をつけて岸辺近くの海中にやはり便所がある。かつてトラックの風物詩のように思われたものがなくなっても，永い間の習俗が断ちきれない郷愁かも知れないが，その形は現代化しているものの海上珊瑚礁の上にある。

ただ海より離れた所は，地面に穴を掘って小屋がけして用を足している。一ぱいになれば，他の所に穴を掘り移動する。これは未開地でよくみられるし，パリ島やスラウエジ（セレベス）では用水の流れに腰までつかり，沐浴をしながら用を足す所もある。

とにかくこの写真でみられるような岸の近くに所々存在している。ただし干満の差が1m近くあるので，干潮のときは海水がひくので，法律上では海上便所とはいえないのかも知れない。

9．ライフ・ジャケット

トラック島の慰霊を終え，空路東へ1時半ポナペへ着く。ポナペはミクロネシア連邦の首都人口3万。しかし観光開発が遅れており，街の主要街路といっても，まばらなニッパ椰子葺の住居が点々として存在，島民は素ぼくな生活を続け，温和で人なつこい。ここも30数年間，わが国に統治され，60才以上の人々は日本語をはなす。

ポナペの一日は観光で，島めぐりとナンマ

ドール島の視察に費やす。私どもは3隻のモーターボートに分乗したが，何分にも5～6時間の海上，危険をおもんばかってか，ライフ・ジャケットを背負わされる。この救命具の装着は，昭和18年12月，宇品よりトラックへ向ったとき以来で，タイム・トンネルをくぐり抜けた気持になる。金沢へ召集されて最も力を入れられたのは，海没に対する訓練で，応召兵の半数は，信州出身で，海での水泳の経験はほとんどなく，そのため金沢市郊外の白雲楼のプールで，毎日水泳訓練，その教官は大沢天臣中尉（厚生連高岡病院大沢汎副院長の尊父）で，当時に思いをはせるが，同中尉はトラック海域で，米潜と空爆で，乗船が轟沈し，戦死された。私は，幸にも先発で無事トラックに辿りついたが，このライフ・ジャケットを装着し，船上で退避訓練を毎日続けていたのが，今つけさせられた救命胴衣が，あの頃を想起する。

この内容は，綿の如きもので，圧すると凹む軟かいもので，綿布でジャットのようにしてあり，上体の前後を包む。この綿様のものは，カポックで，カポック樹の果皮の内側に生じた毛で，この樹はアメリカの熱帯地方，あるいはスリランカ産とされているが，今は東半球の熱帯地方に多く栽培されている。40余年前トラックに駐留していたとき，よくみかけたが，今回密林に入る機会がなかったのでみることができなかった。その繊維が弱く，表面が滑りやすく，含気量が高く，極めて軽く，断熱性が大，比重が小さく，自己重量の30～50倍のものを水上で支えることができるので，救命具などに最適とされている。

ライフ・ジャケットを装着した島巡り

今，海上観光でこれを装着させられ，かつて船上で重い軍装備の下にこれをつけ，対潜，対空の訓練に，また監視に汗水たらした当時を懐顧し，感慨新たなものがあった。

なお，航空機で旅行するとき，スチュワーデスが必ず救命胴衣の説明するが，いつも上の空で聞いている。これは空気を充てんさせるもので，カポックと空気のどちらが有効性が高いか，私にも判らない。

ただし，30℃を超す熱さで，これをクッション代りに尻の下に敷いていたものも少なくなかった。

10. ナンマドール遺跡

数多い水路のなかの小さな島，このなかに何千万本とも知れぬ玄武岩柱が，列をつくって積み重ねられてある。これが縦横に走り，しかもその間，通路と考えられ人の歩行も可能である。この岩柱は，今の機械技術でも運搬は容易でなかろう。しかもこれはポナペ本島より運搬し，自由自在に造成し，このような巨石建造物を完成した古代人の力と術は驚嘆するより他はない。

しかしこの由来について確説はない。これが島民の祖先か，先住民族の建造物であるか不明である。ここに始めて到達したヨーロッパ人の説によると，その頃の島民の有していた技術とは全く関係なく知られざる過去の文化遺跡とみる他はないといっている。

文化人類学者によると，ミクロネシアの島民は，ポリネシア，メラニシア，マレーの人種の雑種と考えられ，その混血の組合せ，程度は一様でない。その躯幹の大小，皮膚は暗褐色，黄褐色のものもあり，頭髪は滑らかなものもあり，縮れるものもあり，同じ島民でも著しい体型の差異を示す。

ミクロネシアそのものは，太平洋の内ふと

ころに隠された砂礫の如くであって，地球上世界文化から隔絶された地点の一つで，15，6世紀の発見の潮は，絶海の孤島の岸を洗ったが，大陸より遠隔の地であり，狭小かつ天然資源もなく，それ自体陸地としての重要性もなく，文明の圏外に放置されていた。しかも文字を持たない民族で，この地域に各所で発見される遺跡も，その起原については憶測の域を出ない。

また言語学的には，アフリカのマダカスカルからマレー，インドネシア，ミクロネシア，ポリネシア，メラネシアと系統的に類似点があるといわれ，その関連性が考慮される。とにかくこのナンマドール遺跡の縦横につながる水路の縁には，数多くの巨石建造物が露出している。恐らく強力な氏族の首領（大酋長），あるいは絶大な武力を有した古代の軍隊の城塞とみるのが妥当でなかろうか。

このような巨石で作られた城塞は，南米ペルー，3,000米のアンデスの山中，インカ帝国の首都クスコで私は見た。何千トンもある巨大な岩石が，積み重ねられ，その巨石と巨石の間にカミソリの刃も入らないという。しかもアマゾンの源流にあり，この岩石を如何にして運搬し，築城したか，今日も謎に包まれている。

私はここを訪ね，かつて訪れたインカ帝国の遺跡を想起し，ナンマドール遺跡にたってその思を新たにした。

11. 傷痕（きずあと）

昭和19年2月，第52師団野戦病院約400名のうち，その半数は海中に没し，あるいは空爆によりその命を絶った。戦後4回目の慰霊団は霊を弔うため現地に赴いた。

トラック空港に降り立てば，数十人の島民は，手を振って私どもをむかえてくれる。この地は名目上はミクロネシア連邦として独立したものの，外交，軍事はアメリカの手に握られ，その準州という形で，とくに経済的援助によって生活をいとなんでいる。

ナンマドール遺跡

海岸に立てば珊瑚礁に乗りあげたわが海軍の浮ドック，あるいは掃海艇など坐礁したまま，赤錆をふき出して，その姿を残している。

海底には数十隻の艦船が，引き揚げられることもなく乗員は兵器とともに眠っている。日本政府は，その遺体，遺品の引き上げを要求しても拒否して海底に残置し，バカンスに訪ねるアメリカ人の絶好のダイビングの場所とし，〝海底公園〟として，楽しませている。このことは日本空軍の奇襲により沈没した戦艦ミズリーも，真珠湾の海底に沈み，千数百名の乗員も海底に眠っている。〝リメンバー・パールハーバー〟の象徴として海上の沈没場所に一本の標識を残しているのみである。この戦死者に対する感情の日米の隔りは，私ども日本人には考えられない。

わが陣地，あるいは病院跡を訪ねれば，復郭陣地のそこここに岩盤をくりぬいた洞窟，しかも密林のなか，丈なす雑木，雑草におおわれ，かすかにその面影を残す。またかつて防衛の主力だった重砲や高射砲などの残骸が，風雨にさらされ錆びついたまま放置されてある。

ポナペは，戦略的価値はほとんどなく，この地に対する空爆も少なく，日本軍の戦車は，何の破損もなく，原形のまま道路脇にみられるのが懐かしい。

珊瑚礁に坐礁した日本海軍の
浮ドック(トラック)

ほぼ完全な日本軍戦車

12. マウイ航空

グアムよりサイパンへはマウイ航空に搭乗。ところが私自身，今までこんなお粗末な飛行機に乗ったことはない。双発のプロペラ機，20名の同行者は2機に分乗，つまり定員は10名で満席，外装は所々はげている。乗るときは2階へ登るように梯子をかける。内部の椅子はガタガタで，少し倒せばなかなか元へもどらない。この地ではこれを〝黄色いバナナ〟と呼んでいる。

後になってある本を読んでいると，マウイ航空は今まで数回しか落ちたことがないと，島の人達は自慢していると書いてある。このマウイ航空は，マリアナ諸島をグアムを基地として，サイパン，ロタ，ヤップ，パラオなどを結ぶローカル線らしい。何分にも午後7時過ぎ発で，暗闇で全貌がみえないから，老朽振りには気がつかなかった。

私はかつて県公安委員長をしていたとき，交通安全週間に県内上空をヘリコプターで，道路交通状態を視察したことがある。そのとき操縦士に命じて弥陀ケ原から剣岳近くまで飛ばせたが，何らの不安感もなく快適であったことが思い出せる。こんな飛行機よりもヘリコプターの方が安全性があるように考えた。

そんな危惧の念を頭にかすめながらも，1時間5分でサイパン空港に着陸。直ちにホテルへ向う。ホテルでは慰霊団の解散式，誰も搭乗機のことを口にせず，メートルをあげていた。

13. バンザイ岬

昨夜おそくグアムよりサイパン着，本日は朝8時半の航空機で成田へ。そのため早朝6時ホテル出発，玉砕したこの島の最後の拠点バンザイ岬に向う。黎明には程遠い暗闇のなかバンザイ岬に達す。

サイパン島の北端，聞えるものは太平洋をさかまく怒濤のみ。この岬に追いこまれた日本軍は，この絶壁にある岩窟のなかで，軍司令官以下自決，また住民の多数は砲爆撃により死亡，残ったものは，老いも若きも男女をとわず小供まで「バンザイ」を呼んで，この岬より，その身を太平洋の怒濤のなかに消え去った。この暗闇のなか，高さ数十米の絶壁に立った私どもは，波の響きに鬼気すら感ずる。

このサイパンは，日本の統治中は，砂糖の

マウイ航空機

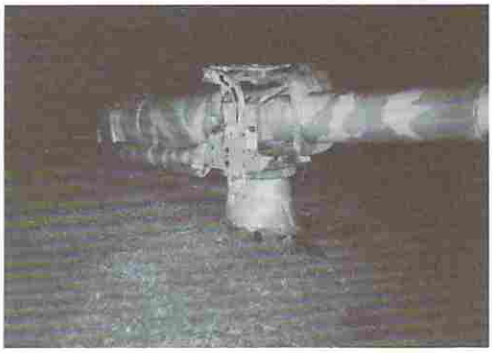
主産地で，南洋興発会社によって甘蔗（砂糖きび）の栽培し，ガラパンという町に日本人の居住が多かったという。

この岬に戦後アメリカにより集められた，日本軍の破壊された戦車，各種の火砲が，洞窟前の広場に集められている。

私ども野戦病院の一部約20余名は，軍命令により業務援助のため残置してきたが，全員玉砕した。またサイパン陸軍病院長，深山一孝大佐は，金大耳鼻科で私の先輩，さらに後輩である島文雄君（富山市出身）はこの地で玉砕している。このバンザイ岬に立ち，痛恨の思いが胸をうち，心から哀悼の意を表した。

バスを走らせるうち漸く明るさをます。甘蔗畑と思われるなかに，その運搬に当った小型の汽かん車が錆ついたまま放置してある。かつて在留邦人が開発につとめた往時が偲ばれる。走る道路の両側には南洋桜が満開，そ

破壊された日本軍戦車
（バンザイ岬）



破かいされた日本軍火砲

の紅に染める美を眼にやりながら空港に着く。団員一同，多大の感慨を殊し成田へと帰国の途につく。

14. Part Marriage Practics in Truk

（トラック島の過去における結婚の慣習）

トラックにおいて嫁をもらう過程は，昔からみると変化してきている。それは他人を混えないで，若い二人同志で話し合う。これはかつてはなかったことである。この話し合いが合意に達すれば結婚する。

ただ，結婚については三つの過程がある。しかしそれぞれに両親のかかわりあいがウェートをもつ。

可なり以前までは，結婚する前に，相手の男が，農耕，漁業，また舟（カヌー）を作る技能があるか，また自分で住むべき家が作れるかどうかをたしかめる。その技術能力があると判れば，両親に話し，結婚の準備を進める。つまり若い男女が決心したとき，結婚の用意をしてもいいか両親に申し入れる。両親は娘に意志を確かめ，娘が了承したならば，男の両親は，娘の両親を訪ね，結婚の申し入れをする。その両親の承諾があれば，男は女の両親の所に泊り，結婚の日まで一緒に居住して生活をする。結婚式の前までに，両方の家族や親戚の主だったものが，式のための準備をする。習慣に従って，嫁の家庭では，婿の家族や親戚に対して，十分な歓待やご馳走

の用意をととのえる。

もう一つの方法は，若い二人の家庭によっては，二人の住いをする住居を用意してくれる。またある場合は，その家庭の兄妹が結婚するとき，既に結婚した兄弟，姉妹にもこのようなことを要求する場合もある。

しかし結婚しても，夫婦の性格の合わないときは離婚できる。

もう一つの形式は，秘密裡に結婚が行われるものもあるが，一般的ではない。しかしこのようなときは，男は，女の父親に金を惜しまず贈物をする。これは男が，女に対し積極的に求婚したこととなり，男は娘の父親に対して，法律的の義務を負う。

この両者の間に，完全に性的結婚生活ができれば，周囲の人々からよく働く人と認められる。

労働に対して無能の人間は，トラックでは成功しないといわれている。

(MICRONESIAN CUSTOMS AND BELIEFS) より訳

15. Changing Foods and Eating Habits In Truk

(トラック島の食糧と食事の変化)

トラック島住民の食糧と食生活の習慣は，最近とくに変化してきている。それは外国との習慣と文化との密接な交流を有するようになったからである。

アメリカの統治の初期，従来の永い習慣であったタロイモ，パンの実，馬鈴薯などを主食としたが，彼らはアメリカの食事の慣習にあこがれたのである。しかもその食糧生産が重労働であったが，それまで充分食べられ，大した関心ももっていなかった。トラックでは「オポット　Opot」という気に入る食糧があったからである。

注：「Opot　オポット」はトラック語で，オポト＝パンの実のこと。

これは手に入れやすく貯蔵ができた。しかし外国の食糧が，輸入し始めると，これに興味を示し始めた。

この島の食糧事情は1940—1950年まで最良であり，豊富でこれを売る余裕もあった。島民は，共同して生産し，これをマーケットなどに売り成功していた。

1960年代後半から1970年代に至ると住民の作業意慾が低下してきた。それは政府が島民をやとい入れ，給料を払うようになったからである。それに外国からの輸入食糧の増加も一つの理由である。

それに金銭感覚，金でものを買えるという感覚が出てきて，外国の食糧に対する依存度が増し始めた。そのため住民の食習慣が漸次変化してきた。

1960年代まで，古いしきたりが守られてきた。例えば，同一家族，または同一氏族は，村の異なった場所に住んでいた。しかし母や娘は，これらの世話をする。食事の用意ができると，父親や兄弟が集って食事をする。つまり近縁のあるものは，同一場所で食事をする。外出していても呼び出して集める。

またトラックでは，指で食事をする習慣が永い間あった。お祝の宴会やパーティには，スプーンをもってゆくことになる。ただし小人数のときは古い習慣で指を使う。

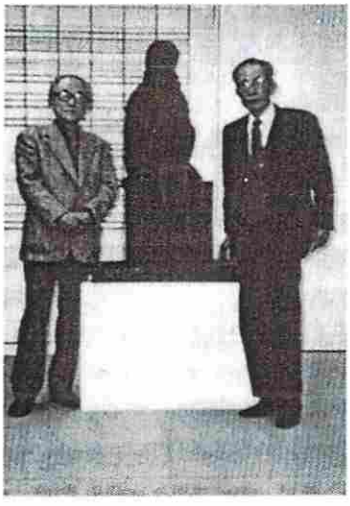
しかしレストランや外国人とともに食事をするときは，ナイフ，フォーク，スプーンを用いる。

輸入食糧が，しばしばこれを食べているがそれでも大多数の住民は，従来の方式〝Opot〟の方式で食事をしている。

(MICRONECIAN CUSTOMS AND BELIEF) より訳

16. 一つの印鑑（ハンコ）

敗戦の翌21年1月，アメリカのＬＳＴ（上陸用船艇）に乗せられて，懐かしい故国に送還されることになった。しかしアメリカ軍命令により持ち物は着衣と洗面具だけ，他は一



（左、村上炳人氏、右、著者）

切持ち出し禁止，乗船前，生まれたままの姿で米兵の検閲，所持品は厳重な取り調べ，上記以外のものは，すべて没収。私はこれだけはと思い珊瑚礁のカケラとトラック島駐留中に使用していた印鑑を衣類の折目に押しこみ，何とかごまかして乗船，無事浦賀に上陸した。この二つはトラック島からの唯一のものである。

今，行政はハンコ行政というが，旧軍隊はそれ以上のものであり，野戦病院では上は病院長，さらに診療主任，担任医官，病室附下士官に至るまで，診断書や証明書にはハンコの行列である。どうしたことか，私はその印鑑を紛失してしまった。さて途方にくれたが，軍隊はサインは通用しない。幸いに衛生兵のなかで彫刻を修業しているものがいると聞き，

モリ・コベン氏

村上氏作製の印鑑

部下を介してこれを作るよう命じた。

それは村上丙君（炳人）であり，ただちに印鑑を作製してもらえた。私は4回にわたりミクロネシアへ慰霊の旅を行い，現地の品物の色々のものを貯えているが，本当に私の胸に刻みこまれているのは，この印鑑である。帰ってから一時実印として使用していたが，今は革の袋に収納して大切に保存している。

たまたま今年3月，北日本新聞社の主催で村上炳人彫刻展が，富山県民会館で開催された。その評に「高岡市出身の彫刻家村上炳人氏は写実を表面から取り組み，自己の造形を確かに築くとともに，抽象作品にも明確で，鮮やかな世界をもち，その独自な造形美は広く知られる。文化財復元や野外彫刻制作などに幅広く活躍している」と。

同氏は，平櫛田中に師事，二紀会に属し，理事，監事を歴任している。

私にとっては，トラック島にて生死を共にした戦友であり，その芸術に対し限りない憧憬をもっており，たまたま上京中，昨年も東京和光ホールの個展も参観した。

私は，個展の初日，3月11日，富山市の県民会館へ思い出深い印鑑を持参して訪れた。個展はブロンズ，木彫による人間，動物，オブジェなど具象と抽象が総合され深みのある造形世界といえる。

1年振りに話し合う機会を得，持参した印鑑を呈示したが，40余年前，アメリカ軍による爆撃と飢餓にさいなまれながら，私のためにこれを刻みこんだ記憶を忘れず，しかも印材に使用したものはパンの木と，当時を想起し，懐かしいまなざしでみつめていた。

私は，トラックから帰還に際しての唯一の記念であり，今後も大切に保存し，座右から離さず持ち続けたいと思っている。